

第二十六課

わたしは、あなたのために祈りました

仲保者キリスト

「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。」

(ルカ二二・三二)

「わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。」

(ヨハネ一六・二六)

「キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」

(ヘブル七・二五)

霊的生活の成長はすべて、私たちにとってイエスはどのようなお方であるかについての明確な洞察と結びついています。キリストが、私にとって、また私のうちにあつてすべてでなければならぬことと、キリストにあるすべてのものは自分のものであることを自覚すればするほど、自己に死に、キリストのうちに完全に生きる真の信仰生活に生きることを学ぶようになります。ク

リスチャン生活は、もはや正しく生きようと苦闘することではなく、キリストにあって憩い、信仰の戦いを戦って勝を得るために、私たちのいのちなるキリストによって力を得ることです。このことは、祈りの生活について特に真実です。祈りの生活はただ信仰の法則のものとみにおかれ、イエスにある完全な光によって見られるべきものですから、信仰者にとってはもはや骨折や心配事として見るものではなく、キリストが彼のために、あるいは彼のうちになしてくださるところのことを経験するものなのです。すなわち、地上におけるように、天においても絶えず祈りとなって御父のもとに昇るキリストのいのちにあずかることとして理解するのです。そこで、信仰者は、イエスの功績や自分たちの卑しい祈りが受け入れられるものとなるどりなしの祈りを信ずるのみでなく、キリストが私たちにあって、また、私たちがキリストにあって祈るあの密接な結びつきを信じて祈り始めるのです。

救いの全体はキリスト御自身です。すなわち、キリストは御自身を私たちに与えて、私たちのうちに住んでくださるのです。キリストが祈ってくださるゆえに私たちも祈るのです。イエスが祈られるのを見て、祈りを教えてくださいとイエスに願った弟子たちがそうであったように、私たちもまた、御座でとりなしの祈りをしておられるイエスを見て、主が私たちをその祈りの生活にあずかせてくださることを知るのです。

このことは、イエスの生涯の最後の晩を見ると明らかです。イエスは、大祭司としての祈りに

おいて（ヨハネ一七章）、御父に、いかに何を祈るべきか、また昇天の後に、いかに何を祈るべきかをお示しになりました。そして告別の説教において、イエスは、繰り返し、御自分が御父のもとに行くことと、弟子たちの新しい祈りの生活とを結びつけておられます。この二つは、究極的には結びつくものです。イエスが永遠にとりなしのみわざを始められたことが、御名によって祈る新しい祈りの生活の始まりとなり、力となりました。とりなしの祈りをしておられるイエスを見ることが、主の御名によって祈る力を私たちに与えるのです。祈りの権利と力はキリストのもので、キリストは、私たちをキリストのとりなしの祈りにあずからせてくださるのです。

このことを理解するためには、まず、キリストのとりなしの祈りについて考えなければなりません。キリストは、いつも生きていてとりなしをしておられます。地上における祭司としてのキリストのみわざは、始まりにすぎません。イエスは、アロンとして血を流されました。また、メルキゼデクとして、永遠の力によって、幕の内側にあってみわざを続けておられます。メルキゼデクがアロンよりも栄光に輝いているように、とりなしのみわざのうちに、贖いは本当に力があがり栄えがあるものとなるのです。「死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」このとりなしは極めて現実的で、絶対に必要なみわざです。とりなしなしに、贖いの継続的適用は不可能

となります。イエスの受肉と復活とによって、驚くべき和解が成立しました。それによって、人間は神のいのちと祝福にあずかる者となりました。

しかし、この地上にある主の肢体である一人一人にこの和解が適用されるためには、天にあられるかしらなる主によって、神の力が絶えず行使されなければなりません。回心にも、聖化にも、罪と世に対する勝利にも、すべて、救う力のあるお方の本当の力が注ぎ出されなければならぬのです。この力は、キリストの祈りによって初めて行使されます。キリストは御父に願い、御父からお受けになります。「キリストは……、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」主の民には、主がとりなしによって、神の与えてくださったものを受ける以外、要求すべきことはありません。御座におけるとりなしは、十字架でのとりなしと同様に、真実で欠くことのできないものです。キリストのとりなしの祈りなしには、何事も起りません。とりなしは、御父の右の座におられるキリストの絶えざる務めであって、このためにキリストの時も力も皆、費やされるのです。

私たちは、その恵みにあずかるだけでなく、そのみわざそのものにもあずかります。私たちがキリストの体だからです。体と肢体は一つです。「頭が足に向かって、『私はあなたを必要としな』い。』と言うことはできません。」私たちは、イエスの人格と所有物のすべてにあずかります。

「わたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。」 私たちは、キリストのいのちと、義とみわざにあずかる者であり、キリストのとりなしの祈りにもあずかる者です。主はこのみわざを、私を抜きにしてはなさらないのです。

私たちがこのみわざを行うのは、私たちがキリストのいのちにあずかる者であるからです。

「キリストは私たちのいのちです。」 「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。」 キリストと私たちのうちにあるいのちは同一です。天にいますキリストのいのちは、常に祈るところのいのちです。そのいのちがくだって私たちのものとなってもその性質には変りはありません。私たちのうちにあっても、それは、絶えず祈るいのち、すなわち、絶えず求め、神から答を与えられるいのちです。このことは、祈りには二つの流れ、すなわち、一つはキリストからの流れ、もう一つはキリストの民からの流れというものがあるのではありません。本質的にいのちの結びつきのあるところには、祈りの結びつきがあります。キリストの祈りは私たちを通過し、私たちの祈りはキリストを通過します。キリストは、金の香炉を持った神の使者であられます。「彼にたくさんの香が与えられた。」 受け入れられる祈りです。「すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。」 私たちは、仲保者なるお方の中に生き、またとどまるのです。

ひとり子なるお方は、祈る権利を持つ唯一のお方です。このお方に対してのみ、「求めなさい。

そうすれば与えられます」と言われました。あらゆるものがキリストのうちに満ち満ちているように、真の祈りもキリストのうちに満ちています。キリストだけが祈りの力を持っておられます。霊的な生活の成長は、すべての宝はキリストのうちにあって、時々刻々、私たちがキリストにあって所有しているものの中から与えられて、恵みから恵みに進むことをはつきり洞察することによって成し遂げられます。祈りの生活もまた同じです。イエスのとりなしの祈りを信じる私たちの信仰は、私たちが祈らないから、あるいは祈れないから、キリストが代って祈ってくださいということではありません。むしろ、私たちのいのちと信仰の創始者であるキリストがともに祈らせてくださるということです。私たちの祈りは、この点でも信仰の働きでなければなりません。私たちのうちにそのいのちのすべてを与えてくださるように、満ちあふれたキリストの祈りの中から、私たちに祈りの息吹を吹きかけてくださるのです。

本当に、また完全に、キリストが自分のいのちであり、そして忠実で、従順であり続けることの保証でいてくださることが明らかにされる時、それは、多くの信徒にとって、霊的生活の新時代の幕開けとなります。その時に初めて、本当の信仰生活が始まるのです。キリストが自分の祈りの生活の保証人でもあることを発見することほど大きな恵みはありません。キリストは、聖霊によって御民に伝えられる、あらゆる祈りの中心、また体現であります。主は体のかしらとして、自らお開きになった新しい生きた道の導き手として、私たちの信仰の創始者、また完成者と

して、「いつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです」。キリストは、贖われた者たちのために、御自身のいのちをそのうちに与え、あらゆる必要を満たしてくださいませ。キリストは、彼らの祈りの生活を顧み、天の御自分の祈りの生活へと導き、その祈りの生活を彼らのうちに与え、また守ってくださいませ。「わたしは、あなたのために祈りました。」これは、私たちの信仰の必要がなくなるためではなく、信仰がなくならないためです。私たちの信仰と信仰の祈りは、キリストに根ざしています。「あなたがたが、いつも生きている仲保者であるわたしにとどまり」、わたしとともに、わたしにあつて祈るなら、「何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます」。

イエスのとりなしの祈りに私たちはあずかるということは、前に、イエスが一度ならずお教えになったことを思い起させます。すなわち、これらのすばらしい祈りの約束の目標と正当性の根拠は神の栄光であり、それは神の国と罪人の救いの中に示されています。私たちが、ひたすら、あるいはおもに、自分自身のためにしか祈らないとするなら、最後の晩の約束は、私たちに与っては封じられた書物にすぎなくなってしまう。先の約束は、実を結ぶ枝、御父が御子を遣わされたようにこの世に遣わされた者、滅び行く人々のために生きる者、主が残して行かれたみわざを成し遂げようとする忠実なしもべ、親友、主のように一粒の麦となつて地に落ちて多く実を結ぶ者に与えられたのです。一人一人が、みわざが何であり、どのようなたましいが私たちの祈

りにゆだねられているのかを見出しましょう。彼らに対する私たちのとりなしの祈りを、神との交わりの生活にしましょう。そうすれば、祈りを力あるものとする約束が、ただ私たちに実現するだけでなく、私たちがキリストにとどまり、キリストが私たちにとどまってくださることが、人を恵み救うところの主のお喜びに私たちをあずかせてくれることを悟るようになるでしょう。

ああ、恵み深い主イエスのなんとというすばらしいとりなしでしょう。私たちは、そのとりなしにすべてを負っているだけではありません。実際的なパートナー、また同労者とされているのです。今こそ、私たちは、イエスの御名による祈りの意味と、その力の理由を理解できました。御名のうちに、御霊のうちに、御自身のうちに、御自身との完全な結びつきのうちに力があります。人なるキリスト・イエスのすばらしい、常に実際的な、最も効果的なとりなしがあります。私たちは、いつ完全にそのとりなしに身をゆだね、その中で祈るようになれるでしょうか。

恵み深い主よ。へりくだってあなたをあがめ、あなたの御前に身をかがめます。あなたの贖いのみわざ全体は、今や祈りに移行しました。あなたのうちにあるもの、すなわち、あなたが御血をもって買われたものを保持し、分配することに従事するわざは、ただ祈りのみであります。あ

あなたは、いつも生きていて祈っておられます。私たちは、あなたのうちにあり、あなたのうちにとどまっていますので、御父に直接近づく道はいつも開かれ、私たちの生活は絶えざる祈りの生活となり、祈りの答は保証されています。

恵み深い主よ。あなたは御民を祈りの生活の同労者としてお招きになりました。あなたは、御自身と御民を結びつけ、あなたの体である御民をとりなしの祈りの務めにあずかせてくださいます。このとりなしの祈りだけが、あなたの贖いの実と御父の栄光とを世界に満たすことができます。私の主よ。私は以前よりもはるかに自由な気持でみもとにまいりました。どうか、私に祈りを教えてください。あなたのいのちは祈りであり、あなたのいのちは私のいのちです。主よ。祈りを教えてください。あなたにある祈り、あなたのような祈りを。

そして、主よ。あなたが弟子たちに約束なさったように、あなたが御父におり、私があなたにおり、あなたが私のうちにおられることを教えてください。聖霊の結び合せる力によって、私のすべての生活が、あなたとあなたのとりなしの祈りのうちにとどまるようにさせてください。ように。それは、私の祈りがそのとりなしの祈りのこたまとなり、御父が、あなたにあって私に、また、私にあってあなたにお聞きくださるためです。主イエスよ。すべてにおいて、あなたの思いが私のうちにありますように。また、私の生活がすべてにおいてあなたのうちにありますように。どうか、私を、世界に祝福をもたらすあなたのとりなしの祈りの管とならせてくださ

い。

注

イエスの御名によって祈る新時代のことは、御霊が注がれる時として、キリストが示しておられました。この新時代には、弟子たちは贖いの摂理をもっと明らかに理解し、キリストが御父と一つであるように、自分たちもキリストと一つにされていることをはっきり意識するようになりました。イエスの御名による祈りは、今や、直接御父にささげられます。「わたしはあなたがたに代わって父に願ってあげようとは言いません。父ご自身があなたがたを愛しておられるからです。」イエスは、御霊が来られる前に、その時のことをこう言われました。「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。」キリストにあつて、私たちが神と、生けるきずなで、両面的に結ばれていることを洞察することがこの祈りの主眼です（ヨハネ一七・二三）『わたしは彼らにおり、あなたはわたしにいられます』。そこで私たちは、イエスにあつて、御父が私たちと一つになり、私たちが御父と一つになっているのを見ます。イエス・キリストは、頭の中の真理によって啓示されるだけでなく、一人一人の内なる意識の中で、生きた和解者として、また、神の父性と御父の愛が完全に人間性と結びついた方として啓示されます。直接御父に祈ると言っても、それがキリストの仲介を無視することではありません。キリストはもはや、外なるもの、私たちの外に存在する方ではなく、私たちのうちにあって、真に生き生きとした霊的存在者なのです。すなわち、私たちのための仲保者キリストは、私たちのうちに真にいましたもうキリストとなるのです。

神がキリストのうちにおられ、私たちがキリストのうちにあるという一体感が十分でないか、罪の意識の

ためにそれがぼんやりしているかなら、信仰の祈りは、私たちのために祈ってくださる助け主としての主に向けられます(ヨハネ一六・二六を一四・一六、一七、ルカ二二・三二、Iヨハネ二・一と比較しなさい)。祈る時に、このようにキリストを助け主として迎えることは、ヨハネの福音書一六章二六節によれば、御名による祈りと必ずしも同じではありません。助け主であるキリストの任務は、キリストとキリストにある御父と私たちとの間にある、自立的でないのちにまで私たちを導くことにあります。キリストは、神が私たちと直接的な関係を持ち、いかなる環境のもとでも神との直接的な関係を持つようにさせてくださる方です。しかし、イエスの御名による祈りは、主の命令によって祈る私たちの祈りによって成立するものではありません。主が、「私たちの父よ」と祈ることをお教えになって以来、弟子たちはそのように祈ってきました。にもかかわらず、主は、「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません」と言われたのです。ただ、キリストのとりなしが、聖霊の内住によって、私たちのうちにあっていのちとなり力となった時、そして、主のみことばとみわざに示されている主のみところが私たちの意識と意志を所有し、満たし、私たちが信仰と愛によってイエスを、神と私たちとを一つにする和解者としてお迎えする時、初めて、主の御性質やみわざを含む御名が、私たちのうちにあって(私たちのためにだけでなく)、真実となり、力となります。私たちは、イエスの御名によって、自由に、また直接御父に近づくことができるのです。そして、祈りは確実に答えられます。イエスの御名による祈りは、子が御父に対して持つ自由です。イエスもまた、長子として、この自由を持っておられました。私たちはイエスの立場に立つて祈ります。とは言っても、自分でイエスの立場に立つことができるわけではありません。私たちがイエスにおり、イエスが私たちにおられるという立場においてなのです。私たちは直接御父のもとに行きますが、その御父はキリストにあっての御父であって、キリストを離れてではありません。だから、内なる人がキリストのうちに生きていないで、キリ

ストを生きた方として迎えていないで、みことはが御霊の力を伴って心を支配していないで、主の真理といのちがたましいのいのちになっていないでいるなら、「あなたの愛する御子によって」というような形式が通用すると思ってもむだなことです（『キリスト教倫理』T・T・ベック博士）。